東京湾で幻のイソギンチャクを発見

柳　研介

フランツ・ドフラインが採集したイソギンチャク

明治から大正にかけて、多くの外国人研究者や採集者たちが来日し、日本産の生物標本を本国に持ち帰りました。フランツ・ドフライン博士はそのなかのひとりで、日露戦争開戦の1904年に来日しました。ドフライン博士は、相模湾を中心として海洋生物の調査を行い、採集された多くの海洋生物の標本はドイツに送られました。そのような標本のうち、三浦半島城ヶ島沖で採集されたドフラインイソギンチャクは、1908年に新種として発表されました。しかし、その後長い間、この種は浅海に生息するサンゴイソギンチャクと混同されており、その学名はサンゴイソギンチャクに充てられていました。真のドフラインイソギンチャクは、2001年にアメリカ人研究者によって、ニューカレドニア、フィリピンやパラオの深海から再発見され、ドフライン博士の採集したイソギンチャクはサンゴイソギンチャクとは異なることが確実となりました。しかし、その後も日本では真のドフラインイソギンチャクの再発見はなく、「本場」では幻のイソギンチャクとなっていました。

タイプ標本の探索

筆者はこのドフラインイソギンチャクが実際にどのようなイソギンチャクであるのか、新種発表された論文に記載されている内容だけでは判断できない点について、新種発表のもととなったドフライン博士が採集した標本（タイプ標本）を検討するため、それが保管されているドイツのミュンヘン動物学博物館を訪れ、標本の観察を行いました。確かにサンゴイソギンチャクとは明らかに異なるイソギンチャクでしたが、筆者がこれまで何度も調査してきた相模湾では見たことのないイソギンチャクでした。果たして当時本当にこれが日本で見つかったのか、疑問さえ抱くようになっていました。

ついに見つかった！

そのような中、共同研究者のお茶の水女子大学（当時）の廣瀬慎美子博士から、2012年10月24日に東京湾浮島沖の水深100-200メートルの海底で変わったイソギンチャクが採集されたとの一報が入りました。まだ生きているということで、早速同大学の実験所のある館山を訪ね、そのイソギンチャクと対面しました。追い求めていたドフラインイソギンチャクであろうと直感し、標本にして詳しく調べるとともに、先のタイプ標本との比較検討を行いました。その結果、このイソギンチャクが真のドフラインイソギンチャクであることが確かめられました。また、この個体のDNA情報から、この仲間の進化について重要な知見を得ることができました。この結果は、2015年12月発行の国際学術誌Species Diversity誌に掲載され、新聞やテレビ等でも報道されました。本場日本でドフラインイソギンチャクが100年以上も再発見されなかった理由としては、別のイソギンチャクと混同されていたうえに、タイプ標本の調査が行われなかったこと、当該海域の調査が十分ではなかったこと等が挙げられます。日本産のイソギンチャク類の多くは、ドフラインイソギンチャクと同じような分類学的な問題を抱えており、現在もこれらの「幻のイソギンチャク」を追い求める研究を続けています。今後の再発見をご期待下さい！

ミュンヘン動物学博物館に収められている新種発表に用いられた標本（タイプ標本）

120年ぶりに東京湾で再発見されたドフラインイソギンチャク

（分館海の博物館）